

〈火を燃やす〉

畑で火を燃やした。「うん？火を燃やした？火は燃えている状態を指すから、火を燃やすという表現はおかしいのでは！」と不思議に思って調べたら、特に問題はなさそうなので、そのまま使うことにする。収穫を終えた夏野菜や枯れ草、剪定した枝などがたまっているので畑で燃やすことにした。完全に乾燥しきっていない草は水分を含んでいるので白い煙がもうもうと上がる。消防署の指導が入らないかとヒヤヒヤしながら次々に燃やす。今でこそガスや電気での煮炊きが普通となっているが、子どもの頃はご飯炊きも風呂沸かしも全て直火だった。簡単な風呂沸かしは子どもの仕事だった。登校前には庭で落ち葉を燃やし、その中に小石を入れて温めたものを、カイロ代わりにポケットに入れていた。“火”は日常の中に当たり前にあった。



昨日、年長さんと山で遊んだ後、一人の男の子が近くにあった黒いものを指さして、「あれ、なに？」と聞いてきた。焚き火をした後の炭が残っていたのだ。“そうか、この子たちは炭の存在を知らないんだ”と、改めて認識。当然、生の火も見ることがないのだろう。“ほら、手に持つと黒くなるでしょ、そしてこうやって葉っぱにこすると字が書けるよ”と見せてやる。薪からガスへ、さらにはIHへと変わっていき、子ども達は生の火を見る機会がなくなっている。小学校の理科で燃焼の実験をするが、マッチを擦れない子がたくさんいる。日常生活で必要ないものは生活の中からどんどん消えていくので使えないのは当たり前。火をコントロールできない大人も増えてきていて、“煙が目に染みる”とか“埋火”、“燃え尽きて灰になる”なんていう言葉は実感を伴わず死語になってしまうのだろうか。焼き芋を食べながらそんな他愛のないことを考えている。